

返礼の回路を生み出す地域の文化資源

—被災から13年目の宮城県牡鹿郡女川町—

中野 紀和 (大東文化大学社会学部)

Local Cultural Resources Facilitate Reciprocal Relationships : A Case Study of Onagawa in Miyagi Prefecture 13 years After the Great East Japan Earthquake

Kiwa NAKANO

要旨

東日本大震災から13年が過ぎたが、被災地では今なお復興が続く。多くの支援者がこれほど長期にわたり当該地域と関わり続けることができるのは何故なのか。本稿では人びとのつながりと関係性の維持のありようを具体的な祭りや行事の場を通して考察する。

土地の歴史や生活環境、身体感覚と結びついた地域の文化資源である祭りは、神輿の巡幸や準備作業を通じて、地元住民にとっては現在と過去の共存を実感する場として、支援者にとっては住民からの期待や信頼を感じる場として機能する。復興支援を契機として女川に関わるようになった者にとって、それは自身の新たな居場所につながる。期待や信頼を実感する体験こそ、これまでの支援に対する目に見えない返礼とみなすことができる。土地に根差した祭りや行事は支援者への返礼を可能にする互酬の場となる。町の復興状況に応じて支援の形も変化し、支援と返礼の関係が幾重にも構築されつつある。

一方で、支援者同士は祭りを介して町とつながりながら、深く干渉しない、フラットな関係を心地良いものとして醸成する。緩やかに集える場の存在も新たな関係性の維持のために機能する。ボランティアとして女川と関わりができた人びとが、長期にわたり地域と関わり続けるのは、支援によって生まれた関係が、住民の文化的価値観を発動することのできる祭りや行事の場で活かされるからである。そして、住民も支援者もその活動に新たな意味を見い出し、一方的ではない、大きな互酬の論理のなかにいることが可能となっているからである。

はじめに

2023年5月3日、宮城県牡鹿郡女川町の鷲神地区にある熊野神社の例大祭が挙行された。甚大

な津波被害を受けた女川町では多くの住宅が高台移転することになり、その宅地造成のために神社も移転を余儀なくされた。仮移転の間も途切れることなく挙行されてきた例大祭は、2020年はコロナ禍で中止となった。そんななかでも工事は進み、2020年に社殿が完成し、同年11月には遷座祭、竣工奉告祭が規模を縮小して行われた。この新しい神社で2021年5月には例大祭が挙行されるはずであったが、長引くコロナ禍のため、神事だけ行い、神輿渡御は中止となった。新しい神社から初めて神輿が下りて、地区を巡ったのが2023年5月3日であった。筆者にとっても4年ぶりの神輿渡御への同行であった。

コロナ禍前の、仮宮からの神輿渡御では、土地は造成中で区画整理の終わった戸建て用の空き地があちこちに散見された。神輿渡御は氏子が住む地区を巡るものであるが、2、3年続けて参加すると、毎年少しずつその順路が変わっていることに気付く。津波から町を守るために町全体を嵩上げしたことから、生活空間そのものが変化するからだ。筆者が初めて女川を訪れた2011年9月に見た様子からは想像のつかない程の変化であった。

それまで東北地方でフィールドワーク経験のなかった筆者が、土地勘のあった同僚と女川に足を踏み入れた2011年9月は、家々の土台だけが残っていた。高台にある医療センターから、ゴロンと横たわる大きな建物を目の当たりにしたときの衝撃は忘れることはできない。医療センターの階段を降り、住居があったはずの地面から同センターを見上げたときの高さに驚き、津波はそのセンターの1階まで来たと知ったときには言葉を失った。

当該地域での調査経験がない者は人間関係もそこにはなく、このような非常事態に現地とのとっかかりを見出すのは慎重にならざるを得ない。筆者にとっては気になりつつもすぐには入ることのできない場所であった。ようやくとっかかりを見つけたのは、2014年3月のある新聞記事であった。その記事で取り上げられた若者に関心を持ち、連絡をとり、改めて「きぼうの鐘仮設商店街」の一角にあった彼の工房を訪ねたのは、その1カ月後であった¹⁾。

そこから、女川の若者たちが中心となって始めた復幸祭に行くようになり、新たな人に会い、コミュニティスペースを兼ねた飲食店「おちゃっクラブ」を訪ねるようになった。そこは熊野神社の副総代長の店であった。夫婦で切り盛りするその店を拠点に、熊野神社の例大祭や獅子振りを巡る新たなネットワークを知ることになった。医療センターの横の建物で営業していたその店は、区画整理後の2020年2月には元の場所である鷲神地区に店を構え営業を再開した。

この間、女川駅も2015年3月に再開し、駅を中心とした商業エリアから復興が進められた。町全体を嵩上げしつつ、山を造成し住宅地を高台に移し、生活空間がゼロから作り変えられるなかで、以前の生活実践を再生させようとする時、その一つとして祭りや民俗芸能が浮上する。土地の歴史や生活環境、身体感覚と深く結びついているからである。舞台となる空間が新たなものとなり、住民減少が進むなかでの多様な担い手による祭りや民俗芸能の実践は、再生というよりも創造といえる。この創造という行為は、地元住民に加え、震災以降、女川に関わるようになった人びとによっても支えられている。同時に、これほど長期にわたり、人びとが女川と関わり続けることができるのは何故なのか、大きな関心であり疑問であった。本論では神社例大祭とイベントの場に着目しな

がら、人びとがどのように新たなつながりを作り、維持しているのか考察する。

1 祭礼のあたり前を問う

本論の冒頭で、筆者と女川との出会い、状況の変遷に言及したのは、筆者がこれまで経験してきた他の地域のフィールドワークとは異なる感覚をずっと持っているからである。たとえば、他地域で神社祭礼を見るとき、神輿巡幸に同行することは幾度もあった。巡幸はあらかじめ決められた順路を進み、それ自体を当然のように受け止めてきた。ところが復興工事が進む女川では、神社の例大祭の巡幸のたびに順路が微妙に変わる。同じ場所でも景色が違う。土地が造成され、道路ができ、家が建ち、氏子圏内を回ろうとすると順路の変更を余儀なくされる。

視覚的な変化もさることながら、土地の高低が変わるために、前に体感として覚えていたはずの方向感覚がききにくい。たとえば、先述した医療センターは10メートル以上の高台にあり、震災直後は見上げるほどであった。震災からしばらくの間は、その高台に上がるには海沿いの大通りを徒歩で迂回していくしかなかった。2、3年して整備された海沿いの道路からその高台を見上げると、以前よりも低くなっていることに気が付いた。道路のほうが嵩上げされた結果であった。

防波堤を造らなかった女川では町全体が嵩上げされ、小学校や中学校、役場といった主要な建物は高台に造られた。駅からも近くなった小中学校は医療センターとほぼ同じ高さになった。かつて、町を見下ろす高台にあった医療センターを記憶している筆者は、久しぶりに女川を訪れた時、周囲に多くの住宅が建っていることとも相まって、自分の位置がわからず一瞬混乱してしまったことを覚えている。

住民は日々工事の進むなかで生活し、少しずつ新しい空間に馴染んでいく。そこで実施される神社の例大祭もその他のイベントも、新たな空間に適応することで続いている。本稿では、震災から13年目の祭りやイベントの場を、そこに関わる人の動きから描いていく。

2 神輿巡幸で新たな町を体感するー熊野神社の例大祭を歩くー

2-1 熊野神社例大祭の概略ーコロナ禍前と現在の様子ー

フィールドの概要を把握しようとするとき、現地を歩くことはその第一歩となる。地図を活用できない状況で、神社の神輿巡幸への同行は地区の広がりや現状を知るうえでは有効である。地震の前まで熊野神社は堀切山にあり、中腹の女川町地域医療センターの上の200段の階段を上った、今よりも約20メートル高い場所に位置していた。車も入れず、大きな重い神輿は神社まで上げることができず、下の鳥居の横の神輿堂に保管されていたが、この神輿は津波で流されてしまった。それでも、神社が津波の被害を免れていたことから、震災直後の2011年5月に残った小さな神輿を下ろし、医療センターと女川町老人保健施設をまわっている。道具もないなかで、座布団で作った獅子頭を手に子どもたちが獅子を舞ったという²⁾。その後、町全体を嵩上げし高台の宅地を確保す

るために神社は移転を余儀なくされた。

コロナ禍で例大祭が中止となる前の2018年までは、仮移転した場所から神輿巡幸は開始された。2018年の例大祭当日の様子は次の通りであった。朝8時、熊野神社の仮宮で祭典が始まった。氏子総代長の挨拶、神主による祝詞奏上、地区総代、NPO法人の代表や筆者も含めた大学関係者の玉串奉典、参加者全員での記念撮影後、9時に神輿の巡幸が開始された。

2023年5月の例大祭では再建された神社から初めて神輿が下りた。新しい社殿で祭典が挙行され、基本的な流れは2018年と同様であった。このときは、氏子総代長の挨拶、神主の祝詞奏上、地区総代といった地元関係者が拝殿にあがり玉串奉典を行った。それ以外の神輿愛好会をはじめ、ボランティアの人たちは境内でお祓いを受けた。その後、周囲から見えないように白い布で覆われた御霊が神主によって神輿に移された。全員での記念撮影を終え、巡幸に出発したのは9時20分であった。

2018年との大きな違いは神輿の数であった。大小2基の神輿が大中小の3基になっており、1基増えていた。ある集落で担ぎ手がいないまま保管され、扱いに困っていた神輿を熊野神社が引き受けたのであった。それが中型の神輿であり、女性が担ぐ娘神輿として使用されていた。なお、担ぎ手の課題については後述する。

2-2 神輿巡幸の順路

2017年、2018年、2019年、2023年の巡幸順路をもとに、この間の町の変遷を示したい(図1)。なお、2019年の巡幸には参加できなかったが、後日、関係者から順路図を入手し話を聞くことができた。2019年までは移転先の仮宮(図1①)が起点となる。2017年と2018年も進む方向は同じであるが、道路や宅地が整備されるにつれ、距離は徐々に長くなった。

2019年以前の神輿の順路

まず、2017年と2018年の順路についてである。筆者が神輿に同行した記憶と2019年の順路図からみていく。2017年より2018年のほうがわずかに距離が伸び、道路や住宅が再建途中であったことから、歩く場所が微妙に異なっていた。午前中に3回の休憩をとったが、その場所にも変化があった。2017年の休憩場所は上四区の公民館前((2)と(3)の間、③)、上五区の個人宅((3)と(4)の間、①)、浦宿の希望の鐘商店街であったが、2018年は同商店街が閉鎖となったため、新たに開店した上五区のコンビニエンスストアの駐車場((6)と(7)の間)が使われた。休憩場所に向かう経路がより複雑で長くなっていた。戸建てが増えてくると、住民たちも家の前で神輿を待つ。そこを通らないわけにはいかないからだ。

午後は、西区の高台に新しく完成した3軒の家の前((9)と(10)、(10)と(11)、(11)と(12)の間)で獅子を舞うと女川駅に向かった。これが震災前とは異なる最も大きな変更点であり、2016年から2018年までの新しい試みであった。女川浜地区に位置する女川駅は白山神社の氏子圏である。本来なら熊野神社の順路には入らない。しかし、震災後は鷲神地区の住民が高台移転で分散したことから、旧住民たちにも獅子振りを見せたいと巡幸経路に駅前を加えるようになったのである。

ところが、2019年はこの商業エリアまでは行っても女川駅までは入り込んでいないことがわか

る。2023年も女川駅前を左折し帰途に就いている。氏子圏の違いが影響しているようだ。

駅前の商業エリアでは休憩時間を長くとり、獅子を舞う。多くの地元住民に加え、観光客が集まる見せる場でもある。この後、神輿は一気に仮宮へと向かう。神社の手前の急勾配の坂の下で一息つくくと、神輿を担いで一気に駆けあがる。1時間程度の休憩をとって直会が始まる。

2023年の神輿の順路

次に示すのは、2023年の神輿の順路である。2023年の巡幸は、ようやく順路が固まったようであった。それは宅地の整備が終わりつつあることを示している。

図1の真ん中にある熊野神社が起点となり、坂を下って住宅地へと入っていく(①)。これは2019年までとは逆の方向に進むことになる。そのため、最初の休憩場所の②に到着するまで、これまで何度も神輿を担いでいる人が「こんなに急な坂を上ったかなあ」と言うほどに、見知らぬ土地を歩くような感覚であった。休憩所となった家に到着して、ようやく逆方向から坂が上がってきたことに気付いたのであった。つまり、外部から参加する人たちも、坂の上り下りの体感と周囲の景色を記憶化することで、女川の町を捉えていたことがわかる。

他方、地元の氏子総代の一人は、神社からの坂を下っている時に、坂の下の町を見ながら、「町のあちらこちらの土を現在の女川駅のところに集中して入れ、最初に駅周辺を復興した」と話してくれた。さらに、昼食後に金澤不動明王の横を通りかかると、「震災のときは、この辺りの人はこの水にお世話になった。うちもここから毎日水を汲んで使っていた」と教えてくれた。また、高台にある道路から下を見たときに比較的古い家が残っている一画があり、なぜ津波の被害を受けていないのか聞いたところ、「大きな船が近くの川の河口に引っかかり、それが壁となって津波を防ぎ、その一画が残った」と説明してくれたのだった。神輿と共に歩くことは、新たな空間を認識することであると同時に、部分的かつ具体的に残る過去を再認識することになっていた。地元住民にとっては、神輿の巡幸は現在と過去が共存する時間なのである。

さらに、2019年と比べると、昼食後の順路に大きな変化が生じている。2019年以前の(12)は地域医療センターの裏手を通っているが、2023年の⑨は海沿いを通して駅前の商業エリアに向かっている。2020年3月には震災遺構が完成し、海岸沿いが整備されて以降、鷲神地区をより包括するような動きに変わったようだ。



図1：2019年・2023年の熊野神社例大祭神輿渡御順路
 (女川町鷲神熊野神社氏子総代会祭部会が作成した2023年度の図に2019年度版を筆者加筆)

2019年と2023年の神輿巡幸の共通点

順路の違いはあれ、2つの順路には共通点も見いだせる。神輿が大きく3つのエリアを中心に動いている。まず、地図の左側((1)(2)(3)(4)(5)、①②③④)、右下((8)(9)(10)(11)、⑥⑦⑧⑨)である。ここは中心地から少し離れた高台の住宅地になる。これらの地域は、震災前からの家屋が一部に残る。高台だったことで津波の被害を免れた家屋と、新たに造成された土地に建てられた新築が混在する。昼食後に向かう右下のエリア((9)(10)、⑥⑦⑧)は、ひたすら坂を上る。新しい戸建てが立ち並ぶ一画が現れ、そこを廻ると徐々に坂を下っていく((11)、⑨)。神輿巡幸の参加者にとって、坂の記憶が多いのは、住民が居住するエリアを廻る関係上、高台に行かざるを得ないからである。

もう一つのエリアは、女川駅前の商店街である。(12)と(13)の間、⑩のエリアである。居住エリアと比較すると低い場所にあり、平地に見えるが、女川駅に向かってわずかな上り坂になっている。ここは町の中心エリアでもある。図の中央の空白部分(おちゃっこクラブ周辺)は、商業地でありスーパーや店舗が再建されるエリアである。

商店街での獅子振りを終わると、神社までの帰途につく。仮宮も新しい神社も高台にあるため、やはり最後は坂を上らねばならない。仮宮前の坂は距離は短いが急こう配、新しい神社前の坂は傾斜は緩やかだが距離は長い。この坂を、神輿を担いで一気に駆け上がる。⑪には「ダッシュ」と説明書きまである。距離が長く、体力的にきつい巡幸の最後にこのような仕掛けを残していることに

ついて、副総代長は「津波から逃げる訓練だと思ってください」と半ば冗談のように説明していたが、女川の住民にとっては常に頭の片隅に置いておくべきことでもある。

全力で高台に駆け上がることは、2012年から開催されてきた女川町復幸祭の「津波伝承・女川復幸男」のイベントとも重なる。復幸祭自体は2019年に終了しているが、「津波伝承・女川復幸男」は、津波が来たら高台に逃げることを後世に伝えるために年中行事化している。津波が襲来した時間に女川駅をスタートし白山神社まで駆け上がり、一番でゴールした人が女川復幸男として認定されるというイベントである³⁾。

仮宮も新しい神社もその地理的状況を活かし、神輿巡幸に高台ダッシュという遊びの要素を取り入れつつ、「避難訓練」と説明することに、女川の人びとの海との向き合い方がある。防波堤を造ることを拒否し、高台に住居を移し、海を直接見ながら暮らすことを選択した人びとにとって、どのような形であれ、津波の危機を回避するため、高台へ走ることは暮らしの一部に組み込まれているのである。

3 例大祭の巡幸を支える人たち

3-1 鷺神地区の熊野神社をめぐる背景

次に、4年ぶりの神輿巡幸となった2023年5月の熊野神社の例大祭の参加者層に注目したい。2023年の例大祭は関東を中心として神輿の担ぎ手が集まっていたが、2019年から2022年まではコロナ禍の影響を受け、神事だけが氏子総代によって挙行され、外部からの参加者は皆無であった。

東日本大震災の津波でほぼすべての地区が津波で道具を失い、獅子振りの復活の第一歩は道具の調達であった。このときの手続きや経緯等の詳細は既に拙稿で示しているため、ここでは詳述しない⁴⁾。道具の調達はできても、最大の課題は祭礼を支える若い世代の人材不足、氏子総代の高齢化である。これは女川町に限らず、全国各地で生じている課題でもある。本稿で注目する女川町の中心に位置する鷺神地区の熊野神社も同様の課題を抱えており、高校生にアルバイト代を支払って担ぎ手を集めたこともあるという。

熊野神社の年中行事は、氏子総代会と祭部会を担当する獅子振り愛好団体の「まむし」によって支えられている。同団体は若手の継承者不足への対応として、子どもたちに関心をもってもらおうと2008年に代表の岡裕彦氏を中心として結成された。18人のメンバーからなり、このうち10人は小学生から20代の若手である。大半は女川町や周辺地区の出身者である。

例大祭の神輿渡御に際しては、2012年から氏子総代会の祭部会が県内外にボランティアを募り、担ぎ手を募集するようになっていた。当初は反対意見もあったようであるが、深刻な担ぎ手不足を解消するために、受け入れを了承したという経緯がある⁵⁾。2017年の担ぎ手の募集ポスターには次のように書かれている。

女川町全体も昨年とくらべて大きく変化しています。その町の中を神輿を担ぎながら、御神

体と共に、目で見ても肌で感じて人と触れ合いながら、春の女川を楽しんで頂けたらと思います。是非、直会までご参加ください。

人手不足ゆえに担ぎ手を募るという切実な事情はあるにせよ、手伝ってもらっただけでなく、女川が与える何かを期待させる内容となっている。これは、5章で人との関係のあり方を考えるときに再度意味を持つ。

3-2 2017年、2018年、2023年の神輿の担ぎ手

筆者が参加した2017年、2018年、2023年の神輿の担ぎ手の様子を比較してみたい。2017年と2018年は県内外から150人以上のボランティアが集まり、2基の神輿を約70人が交代で担いでいた。地元の鷺神地区からの参加は氏子総代をはじめとする50人程であった。氏子総代たちは神輿を担ぐのではなく、関係者に挨拶をしながら随行するのであるが、高齢化が進んでいるため、これもかなりきつい。総代のなかでも魚の扱いに長けた人は賄いの担当となる等、例大祭当日が滞りなく終わるよう、それぞれが役割を担当する。

実際に神輿を担ぐのは、複数のNPO関係者、宮城県内外の大学の学生と引率者、大学関係者、神輿愛好会、趣味等を通じて女川に個人的つながりを持つ者等であった。熊野神社の副総代長でもあるまむしの代表者、岡氏は震災前からライブハウス経営をしており、音楽関係者とのつながりも深い。その個人的ネットワークによって被災直後の女川の情報が発信され、多くのボランティアの参加につながっている。新たな参加者は、交通整理等の神輿担ぎ以外の手伝いもする。

2023年の例大祭はコロナ禍による3年間の中止期間を経て、4年ぶりの神輿巡幸であった。



写真1：2023年の熊野神社例大祭で神輿を担ぐ人びと（筆者撮影）

境内に集まった半纏のデザインから、神輿巡幸には13の神輿愛好会のメンバーが参加していることがわかる。この他、三重県四日市市からは太鼓の団体が来ており、獅子振りの際にお囃子とのコラボレーションを披露した。地元の人以外にも、筆者のように熊野神社の半纏を着た人たちもおり、これは神輿愛好会とは別のボランティア参加者であった。

それでもコロナ禍前と比較すると参加者が減っており、100人に満たない数となっていた。神輿巡幸について歩く氏子総代会の人数が減っており、高齢化の影響は避けられない。小さな神輿が1基増え、子ども神輿として使われていたのだが、子どもは3、4人しかおらず、結局大人が5、6人で担いでいた。子どもは賽銭箱を2人で担ぎ、神輿について歩いていたのだった。全体として、氏子総代以外の地元参加者がほとんどいないという状況であった。

その一方で、神輿が住宅地を回ると家々から祝儀袋を持った人が出てきて賽銭箱に入れていく。時折、子どもが家族と共に表に出てくると、その子に神輿を担ぐように促し、わずかな距離ではあるが神輿体験をさせていた。神輿に手を合わせて見送る人もいる。住民はけっして無関心なのではないが、巡幸への参加には至っていない。先述したように、巡幸範囲が広く、巡行ルートが長いいため1日がかかりとなる。体力的、時間的にもハードルが高い。4年ぶりの神輿巡幸にあたり、まむしの関係者は次のように語る。

やっぱり、4年ぶりだからね。どうしても間があいてしまうとね。(参加者が少ないのは)仕方ない。それでもこれだけ来てくれるのはありがたい。

神輿愛好会のメンバーとして参加している人たちは、参加の動機や継続について次のように説明する。

(参加者A)：ボランティアに来て以降の参加ですが、毎年来なきゃいけない、というふうには思わないようにしています。義務になると重くなってしまうでしょ。来たいな、と思ったときに参加するようにしています。

(参加者B)：女川に最初に来たのは、2012年の5月。震災直後に(復興援助に来ていた)アメリカ軍の第七艦隊の兵士に神輿の担ぎ方を教えてほしいと日本政府から日本神輿協会に要請を受けたから。現地に来てみて、とんでもない様子(惨状)を見て、これはずっと来なきゃ、と思ったんです。女川とはそれ以来の縁です。

(参加者C)：千葉から来ています。神輿愛好会のメンバーではなくて、会社の同僚がメンバーで、彼女に誘われて。女川は初めてです。女川以外のよそで神輿を担いだことはありますよ。祖父母が宮城県内に住んでいることもあって女川に来てみました。

彼らが熊野神社の神輿を担ぐようになったきっかけは、参加者AとBは震災復興が契機であった。ボランティアや政府および日本神輿協会といった第三者が介在して、女川との出会いがある。その後は個人の主体的選択の結果として巡幸に関わり続けている。参加者Cも会社の同僚という日常のネットワークが基盤にあり、そのネットワークの延長線上に女川との出会いがある。本人が女川との縁がなくとも、このような神輿愛好会を媒介として新たな参加者となっていることがわかる。神輿愛好会に所属する者にとって、神輿を担ぐことが楽しみであることはいうまでもない。このことを象徴する出来事が2023年の春の例大祭で起きていた。

子どもの小さな神輿を担いでいた5、6人の大人が、休憩所で神輿を止める直前、「ソイヤッ、ソイヤッ」の掛け声と共に、膝を屈伸させ跳ねるような動きを見せた。関東の神輿で見られる担ぎ方である。女川の神輿は跳ねるような動きはせずに、「チョーサイ」の掛け声で静かに進む。関東風の担ぎ方に慣れた者には少々物足りないのだろう。突然起きたこの動きに対して、同じくボランティアとして参加していた人が、その土地の担ぎ方をするようにと注意をしたという。

震災以降、熊野神社の例大祭に関わるようになった人の多くが、ボランティアを契機として獅子振り愛好団体のまむしと出会っている。参加者AやBもそのなかの一人である。そこから参加者Cのように、人手不足を補うことに加えて、神輿を担ぐことに楽しみを見出しながら女川と関わり始める者もいる。一方で、コロナ禍による祭りの中止が不参加という空白期間を作りだし、関係を希薄化させることも否めない。

4 おながわみなど祭りと鷲神熊野神社氏子総代会

4-1 2023年のおながわみなど祭り

これまでの支援者が女川と関わる機会は神社の例大祭だけではない。おながわみなど祭りもその一つである。2023年7月30日に開催されたおながわみなど祭りのメイン行事は、大漁旗で飾り立てられた漁船が海に出て、船上で獅子が舞う海上獅子舞である。神事ではなくイベントであるため神輿が出ることはない。そのため、神輿愛好会が集まるわけではない。

2023年で56回目となるこの行事は、漁業の町、女川を象徴する一大行事となっている。女川中の老若男女が楽しみにしていると言っても過言ではない。当日は、小学校の鼓笛隊をはじめとする各種団体によるパレードやステージ上では中学生による吹奏楽等の演奏等も行われる。震災とコロナ禍の影響を受け13年ぶりの開催となった2022年は9団体の獅子振りが参加した。2023年は8団体の参加となったが、これ以外に2団体が船は出さずに陸上のみで獅子を舞った。

熊野神社の関係者も鷲神熊野神社氏子総代会として参加している。この氏子総代会は、春の例大祭を担う氏子総代会と同じである。例大祭は神輿が出ることから、神輿愛好会のメンバー等、町外から多くの手伝いの人が参加するが、海上獅子舞の際はその数はぐんと減る。

4-2 準備を手伝う人びと

海上獅子舞のために、熊野神社氏子総代会の祭部会、すなわち、まむしのメンバーが中心となって大漁旗を船に飾るための笹を山にとりに行ったり、お囃子用の台を組み立てたりと、前日は準備に余念がない。筆者もできることを手伝いながら準備の様子を観察した。

7月29日の夕方、鷺神地区にある「おちゃっこクラブ」を訪ね、挨拶を済ませ、カウンターから少し離れたテーブルに座っていると、見知った顔が5、6人、店に入ってきた。女川出身者で近郊に住み、まむしのメンバーとして活動する男性、同じく女川出身者でまむしの活動をサポートする女性、ボランティアとして関東から女川に通う男性たちであった。囃子台の準備を終えたようだ。筆者と挨拶を交わし、店内で一休みし、翌日の集合時間と場所を確認すると、入浴施設に行く者、そこでビールを飲む者等、めいめいが自由に行動する。ちょうどそこに、翌日の獅子振りの観客に撒く紅白の餅が200個届く。筆者も含め、その場にいた数人で袋に詰めて箱にセットする。雑談しながら今年の祭りで起きた予期せぬトラブルが話題にあがる。トラブルではないが、自分たちの団体に起きた手違いも笑いながら思い出し、今年の参考にする。

お互いに「○ちゃん」「○さん」と呼び合い、筆者も「せんせい」と呼ばれている。同じような作業をする顔見知りである。この関係は、震災から10年間続いた復幸祭や春の例大祭に通い、まだ仮店舗で営業していたおちゃっこクラブに顔を出すうちに自然とできたものである。作業を終えた時、彼らに熊野神社の行事を手伝いにきてくれる人が何人ぐらいいるのか尋ねたところ、互いをどのように認識しているかが明らかになった。

(女性D) 熊野神社のことを固定で手伝ってくれる人は、20人から30人はいる。その時々で、仕事の都合とかで来れる時にそれぞれが来る、という感じ。震災のボランティアがきっかけ。同じ場所に入って何度も来るうちに顔なじみになって、それで、お祭りを手伝うようになった感じかな。

(男性E) お互いに何をしているか、年齢もどこに住んでいるかもよく知らないし、聞くこともない。話をするうちに(家が)近かったんだってわかってくることもあるけど。深く知ろうとしない。

(女性D) ボランティアあって、別に(その人が普段)何をしても、こういうことでは関係ないし、フラットなもの。お互いに深入りしない。なんとなく繋がっている感じ。

同席していた人も頷きながら聞いていた。いつも会えば気さくに挨拶をし、誰からともなく助けあいながら作業をこなしている様子を見ていた筆者は、互いによく知る親しい関係であると思いきんでいた。むしろ、お互いに深く知らない関係性ゆえの心地よさを共有していることに驚く。これは同じ被災地でも農山村における関係性とは異なることにも気付く⁶⁾。女川での人と人との新たな

つながりのありようは、その継続性を考えるうえでも非常に示唆に富む。

4-3 ボランティアからリピーターへ

前日の準備作業を手伝っている人のなかには、まむしのメンバーだけでなく、コロナ禍以前から春の例大祭でよく顔を合わせていた人が数人いた。前年度のおながわみなと祭りにも来ていたことを思い出した。彼らは熊野神社が関わる行事にはサポーターとして駆けつけており、震災以降にボランティアとして女川との関わりができた人たちであった。

海上獅子舞は、船上という限られた場ゆえに船に乗る人は限定される。大漁旗を竹に結び付け、船に飾りつける等の準備作業にはそれなりの時間がかかり、人手を要する。裏方の作業であり、神輿担ぎのように目立つ場はないが、それでも自分のできることを見つけて作業する。とはいえ、2022年度海上獅子舞は13年ぶりということで、震災以降に女川と関わり始めた人には初めてのことばかりであった。



写真2：海上獅子舞のために大漁旗を竹に結びつける（筆者撮影）

準備の段取り等、わかるはずもない。氏子総代たちでさえも13年前の記憶を頼りに準備を進めていった。ボランティアの人たちにとっては、春の例大祭の手伝いとは勝手が違っていたが、責任者の指示に従いながら、前日のお囃子用の台の準備や当日の大漁旗の飾りつけを行っていた（写真2）。この日の船、興七丸の船主は女川の本土側に住み、江島で漁業を営む兄弟であった。船の構造を熟知する彼らも飾りつけを手伝い、海上で船を操作する。熊野神社から船を出すことを依頼された時、彼らは快諾したと言う。熊野神社はこれまでも移転しており、その度に神社が大きくなり縁起が良いので自分たちもあやかりたい、というのがその理由であった。船を出すにあたっての経費は町からの援助があるが、それ以上に「縁起の良さにあやかる」という気持ちが大きく作用しているようだ。

午後の本番前には、午前中から手伝っていた人たちに、氏子総代以外でも熊野神社の半纏が渡される。木綿の半纏は真夏には非常に暑い、これを着ると関係者という立場が明確になる。観客が入れないエリアに入ることができるため、写真撮影等の陸上の作業を担当する。女川出身で関東で生活する30代と思われる若者も2人、昨年に引き続き帰省していた。囃子方として参加し、笛や

太鼓の演奏に従事する。

2023年の準備では、前年に続いて参加したボランティアの人たちは、記憶と経験を頼りに積極的に動き回っていた。準備が終わりに近づいたとき、獅子振り愛好会のまむしのリーダーが、ボランティアの2人に「本番で船に乗って」と声をかけた。船に乗るのはこの祭りのために帰省した地元出身の囃子方の若者や、まむしのメンバーを中心とした限られた人である。そのため、声をかけられた彼らは一瞬驚いたようであったが、快諾した。

さらに、彼らは本番の船上で獅子の中に入るように頼まれていた。最後に船から陸にあがって舞う際に、ひょっこり顔を出し、「いきなり獅子に入って、って言われてびっくりした」と言いつつも、獅子の後方に入り、初めての役をこなしていた。昨年も、ボランティアとして長年かかわってきた別の人が船に乗ることを勧められており、当人は予期せぬことに非常に嬉しかったと、筆者と春の例大祭で会ったときに話していたのを思い出した。この出来事は、支援者が外部者としての参加から一歩進み、より中心的な担い手としての機会を与えられ、同時に住民側も支援を受けるだけでなく、新たな体験を外部の人に与え、楽しさを共有する過程として捉えることができるだろう。

4-4 相互に与え合う関係

このような、氏子総代会をはじめとする地元の人びとと新たに女川に関わるようになった人たちの間には、どちらか一方だけが助けたり、助けられる関係なのではなく、体験や嬉しさ、楽しさといった記憶を通じて、相互に支えあう関係が生まれている。祭りの準備を手伝うという作業は、人手不足を一方的に助けるものではなく、初めて経験する者にとっても知識や経験を蓄積し、それを翌年に自分なりに活かすことで居場所の確保につながっている。

地元の者同士においても、船主と熊野神社の間で、海上獅子舞の舞台となる船の提供と目には見えないご利益が同等の価値として語られる。

外部からの支援者にとって、神社の半纏を渡されることは、祭りのなかで自由に動くことが許され、それぞれの役割が期待され、半纏を着るに値する信用の証となる。だからこそ、真夏の炎天下でも半纏は脱がない。なかでも、海上獅子舞の船に乗ること、獅子に入ることは大きな信頼の証となり、長年の支援に対する返礼とみなすことができる。祭りやイベントの作業のなかで、さまざまな「支える-支えられる」関係が幾重にも重なり始めている。

5 互酬の論理を可能にする祭り

熊野神社が関わる行事が、震災以降どのように継続されているのか、春の例大祭と夏のみなと祭りを観察し続けた結果、人が集うきっかけだけでなく、そのつながりのありようが明らかになってきた。行事の趣旨や内容を軸にみると、例大祭は神社の神事であり、おながわみなと祭りはおよそ半世紀前に始まったイベントであるため、通常は同じ週上で論じることはない。だが、内容のまったく異なる2つの行事の担い手が神社の氏子総代会であることから、鶯神地区の行事の復活や継続

がこの会の動向にかかっていることは明らかである。氏子総代会のメンバーの高齢化が進むなかで、女川町内外からの若い世代の参加は必要不可欠である。町在住の若い世代の参加が期待できない状況では、外からの参加者に頼らざるを得ない。これは震災の有無にかかわらず直面する課題であった。

津波で壊滅的な被害を被った鷲神地区の場合は、復興で集まった多くのボランティアとの関係が、神社の例大祭の神輿巡幸を介して細く長く続くことになった。熊野神社の例大祭は、震災の年も子どもたちが段ボールで獅子を作り、形は変わっても、とにかく途切れることなく続けられた。このように、年中行事である神社の例大祭と神輿巡幸を挙げることで、ボランティアの人たちは自主的かつ計画的に女川に来ることが可能となる。3-1で先述したように、参加者は自分の都合に合わせて、無理せず、神輿を担ぎに来る。

さらに、人手を要する神輿の巡幸は「神輿の担ぎ手募集」というポスターや SNS を活用し広く人を集める工夫もしている。都市部の多くの祭礼では神輿愛好会の存在なくしては祭礼自体が成り立たなくなっており、多くの愛好会が存在する。コロナ禍で人の動きが3年間中断したとはいえ、いまでも10を超える神輿愛好会から担ぎ手が女川にやってくる。女川で震災復興に携わったことが大きな参加動機となっている人もいれば、友人知人の誘いで神輿を担ぎ、付近を観光する人も少なくはない。神輿愛好会というなれば趣味の会であり、その延長として女川で神輿を担ぐ機会を得た、ということなのだろう。それは先述した、神輿の担ぎ方をめぐって起きた小さな出来事にも表れている。この「神輿を担ぐ」ことを目的として人が集まり、一時的であれ賑わいを生み出し、神社例大祭は継続可能となっている。このとき、住民と震災当初からボランティアとして町に関わる人たちと、神輿担ぎを楽しむにくる人たちの目的は完全一致することはないが、それは問題にはならない。「目で見て肌で感じて人と触れ合いながら、春の女川を楽しんで」という担ぎ手募集のポスターの呼びかけは、神輿を担ぐという体験が新たな楽しみを提供する可能性を示している。最後の直会では海の幸を準備し関係者全員をねぎらう。ここにも人手と体験を相互に提供しあう関係が創り上げられている⁷⁾。

災害被災地における支援の難しさを、互酬の回路から分析したスレイターは、支援の提供とその背後にある倫理が必ずしも一致するものではないことを指摘する。物資であれ、サービスであれ、それらを「贈り物」と捉えるとき、受けた「贈り物」には返礼が伴う。この相互の関係がなければ互酬は成り立たない。この互酬の和の中にあることによって自己の尊厳が保たれると考える土壌において、支援する側との関係が長期に渡って続くのか、その場限りの関係なのかによって返礼の仕方が変わる。後者の場合、限られた時間のなかで返礼するという行動規範に従う必要が生じ、それが難しい場合は支援を拒むという行動に出ることがあると、石巻地方の復興支援の現場から論じている（スレイター 2013）。

スレイターの指摘は、女川の現状を考える際に非常に示唆に富む。被災から10年以上が経過し、女川も道路や宅地の整備が進み、支援の形も変化している。町の破壊という危機に直面したときに、獅子振りという自分たちの文化的価値を再認識し、その再生と継続は自己の尊厳を保つ支えとなってきた。獅子振りを演じる場を維持するために人的支援を求めざるを得ないが、それは短期間では

なく長期にわたる関係を求めている。神輿の担ぎ手への返礼は「春の女川を楽しむ」という体験そのものであり、それを受け取った人は自分なりのペースで支援を続ける。直会も漁業の町としての海の幸を支援者に届ける場となる。

震災から13年目に復活したみなと祭りの船に乗ってもらうことも、半纏を着ってもらうことも、支援者が喜びと名誉を感じる体験の返礼となっている。こういう形の支援と返礼という互酬は、時間とこれまでの支援の蓄積の上に成り立つ。結果論ではあるが、支援を受ける側の住民にとって、返礼の可能性を信じることのできる互酬の場は、その土地に根差した祭りや行事のなかにあったことになる。

さらに、ボランティアの側からみると、祭りや行事を介した長期に渡る町との関わりは、人とのつながりそのものである。春の例大祭に続き、おながわみなと祭りで熊野神社氏子総代会を支援する人は、ボランティアとして被災地に関わった人が大半である。そのなかでまむしのメンバーと知り合い、つながりができている。リーダーの経営する店の存在も大きい。町外から訪問した人にとっては、医療センターの横にあった仮店舗はコミュニティスペースとして女川で立ち寄れる場所となっていたからだ。特に例大祭が近くなると、行けば誰かが立ち寄っており「集うともなく集える場所」なのであった。この店は、現在は整備の終わった土地で新たな店舗として再開しており、一般の家を訪問するのとは違って入りやすい。神社の氏子総代会が中心となった行事であっても、それ以外の外からやってくる人が顔を出し、情報を共有できる具体的な場所があることは、女川との関係を保つためには非常に有効である。

しかも、互いを深く知る濃密な関係性ではなく、むしろ深く干渉し合わない関係の心地良さが強調される。希薄な関係とも違う、時と場を共有する「そこにいる」関係が創り上げられている。日常の肩書や背景を持ち込まないフラットな関係の心地よさも強調される。

町外から女川を訪れる者にとっては、それ自体が日常を離れて非日常を過ごすことであり、そこで開催される行事でもハレの時間と空間を体験することになる。その心地よさも長い時間のなかで培われた意図しない返礼としてみることができそうだ。長期にわたって人びとが女川と関わり続けることができるのは、復興支援を契機としてそこで生まれた関係が、住民たちの文化的価値観を発動することのできる祭りや行事の場とつながっているからだだろう。その土地に根付いた祭りは、信頼や名誉、喜びや楽しさを実感させる機会を生み出している。復興支援という枠のなかで支援する側と支援される側に固定されていた両者が、土地の文化資源を介して、一方的ではない、相互に与え合う機会を持ち得ている。両者が、長期にわたる双方向の支援と返礼を可能にする大きな互酬の論理のなかにいるからなのだろう。

おわりに

震災以降、祭りとそれを担う人びとの参与観察を続けるなかで、コロナ禍で社会的な動きが停滞したこの3年間は、被災地とそこに関わる人の関係を考えるうえでは大きな転機であった。3年前

までのつながりは途切れるのか、あるいは継続されるのか、これは女川に限らず、あらゆる日常生活の場面でも問われている。継続される場合、その理由はけっして一つではないことは女川の事例からも明らかである。地域社会のさまざまな要因が複雑に絡みあいながら発動される。本稿では互酬の論理から継続の背景を探ったが、互酬の場もそこでのありようも一様ではない。筆者が女川と同様に継続して関わっている長野県北部地震の被災地である長野県の栄村は中山間地域であり、また事情は異なる。今後は両地域の相違も視野に入れながら考察を深めていきたいと考えている。

注

- 1) この新聞記事は、津波で家族を失った女川のある若者がスプレーアートを通じて、自己と町の再生に取り組む様子を伝えた内容であった。当時、ブラジルのサンパウロでストリートアートのフィールドワークをしていた筆者は、違法とみなされることの多いグラフィティを新聞が取り上げ、そのライターが顔を出していることに驚くと同時に、その人物を介して女川とつながるきっかけを見出した。詳細は中野(2017)を参照されたい。
- 2) 2011年の例大祭については、現地での聞き取りを基に詳述しているので、中野(2020b)を参照されたい。
- 3) イベント名称の「復幸祭」には「幸せをとり戻す」という意味が込められている。「津波伝承・女川復幸男」は、兵庫県の西宮神社の「福男選び」(「開門神事福男選び」)にヒントを得ている。復幸男選びは震災の教訓を語り継ぐために長期の継続を目指すと同時に、避難訓練も兼ねている。詳細は中野(2017)を参照されたい。
- 4) 震災で流された獅子振りの道具を再度揃えるに至った経緯は、当時女川町役場に勤務していた人物の尽力によるところが大きい。獅子振りは行政の支援の対象にはならなかったが、この人物が外部団体からの支援に申請することを提案した。その結果、獅子を流された14団体中12団体が復活のための支援を希望したこともあり、支援を受けるために「女川獅子振り復興協議会」が結成された。最終的には、日本財団、公益財団法人文化保護・芸術研究所助成団体、宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会、アメリカン・エクスプレス・インターナショナルからの支援を受けることができた(中野2020b)。
- 5) 女川駅や女川町役場を氏子圏内に抱える白山神社も、熊野神社と同様に範囲は広い。ただし、白山神社は神輿の担ぎ手を外部には頼っていない。女川町役場の職員たちの自主的な応援を期待できる等、背景の違いが影響している。
- 6) 筆者は、東日本大震災の翌日、2011年3月12日に起きた長野県北部地震の震源地となった長野県下水内郡栄村小滝でも復興過程の調査を継続している。東京の企業の支援を受けて米のブランド化を進め集落の再生を図る小滝では、震災以降、交流人口の増加が著しい。しかし、そのありようは女川とは異なる。小滝の復興過程については中野(2019, 2020a)を参照されたい。
- 7) 相互に提供しあう関係について、小松理虔は当事者性という観点から論及する。当事者と非当事者との境界線を曖昧にすることの意義を説き、共に時間を過ごし「楽しむ」なかで、自然に関わりがで、それが関係を維持していくことにもつながると指摘する(小松2018)。

参考文献

- 小松理虔, 2018『新復興論』ゲンロン
- 中野紀和, 2017「被災体験から記憶の共有へー宮城県牡鹿郡女川町の若者たちの取り組みー」『経営論集』第33号, pp.93-102.
- 中野紀和, 2019「災害被災地における『集落』再生の取り組みー長野県北部地震の栄村小滝における『歴史』ー」『経営論集』第37号, 大東文化大学経営学会, pp.163-178.
- 中野紀和, 2020a「『被災地』となったある集落の模索ー長野県北部地震の栄村小滝の取り組みの土台と展開ー」『信濃』第72巻第1号, 信濃史学会, pp.21-38.
- 中野紀和, 2020b「震災後の新たな生活空間を生きるー宮城県牡鹿郡女川町鷺神地区の獅子振りと神社例大祭の現在ー」和崎春日編『響きあうフィールド 躍動する世界』刀水書房, pp.73-89.
- スレイター, デビッド, 森本麻衣子訳, 2013「ボランティア支援における倫理ー贈り物と返礼の組み合わせ」トム・ギル, ブリギッテ・シテガ, デビッド・スレイター編『東日本大震災の人類学ー津波、原発事故と被災者たちの「その後」』人文書院, pp.63-97.